# 『夜の寝覚』の斎宮

## ――「伝慈円筆寝覚物語切」一葉を糸口に――

赤迫照子

### はじめに

田中登氏が紹介された「伝慈円筆寝覚物語切」三葉は、『夜の寝覚』の、散逸した末尾部分の内容を伝えるものとされる。[1] その内の一葉には、出家した寝覚の女君が斎宮の許で勤行する姿が描かれている。

[1]おもひきこえてしを、中納言のたちつゞきたるなまめかしさ、なつかしさ、こまやかなるにほひなど、やゝたちまさりてみゆるを、さまぐとをくなるまでうちみやられて、人やりならずかなしきにも、「なぞや、わろのこゝろや。いまはかく思べきことか」とせめておぼしをちて、さい宮の御をこなひに御返にいらせ給て、つねよりもをこなひあがし給に、君たちのおもかげは、なを身をはなれず。

我ながらゆめかうつゝかとだにこそ
さめてもさめぬよにまどひけれ

御をこなひのひまには、ちご宮のかぎりなくをよすげまさりたまふを、こひしく、おぼつかなくおもひきこえ給。御かたみには、かぎりなう思ひかしづきゝこへ……[2]

田中登氏はこの一葉から、偽死事件後、蘇生した寝覚の女君が広沢の斎宮の許に身を寄せていたこと、末尾部分において斎宮が「きわめて重要な役割を果していた」可能性を指摘された。[3] また、田淵福子氏は、出家しても我が子への執着に苦しむ様子から、もの思いから決して逃れられない寝覚の女君の主題的状況を読みとられ、この一葉は物語の終末に近い場面だと推定されている。[4]

この一葉については、他の二葉や、「夜寝覚抜書」「寝覚物語絵巻断簡」、仁平道明氏が紹介された「伝後光厳院筆切」[5]との前後関係等、検討するべき問題点は諸々あると思われるが、本稿で注目したいのは斎宮の存在である。本稿では、現存部分と「伝慈円筆寝覚物語切」一葉から、これまであまり注目されてこなかった斎宮の人物造型や、寝覚の女君との関係を考察したい。それによって、末尾部分の様相の一端を探ることはできないであろうか。

### 一　斎宮の人物造型

[2]昔おはせし方には、入道殿の一つ御腹の女二の宮と申しし、斎宮にぞ居たまひにしかど、代はりたまひにし後、きこえをかす人あまたあれど、ことのほかにおぼし離れて、世を背かせたまひにけるが、京の宮も焼けにければ、同じ山水の流れももろともにきこえかはいたまひて、この三年ばかりは、ここにぞお

はしましける。浅くはあらざりけむ御罪も残りあるまじく、行ひすましておはしますを、うらやましく見たてまつらせたまひて、御対面どもあり。　（巻四・四一三）[6]

偽生霊事件によって傷ついた寝覚の女君は、父のいる広沢へと赴く。広沢への移居はこれが初めてではなく、巻二、男君との仲を疑う姉大君に厭われた時に、やはり広沢に逃避したことがあった。その当時の住まいが傍線部A「昔おはせし方」だが、そこは今、叔母斎宮の住居になっているとある。この[2]が斎宮が初めて登場する箇所であり、ここから明らかになることを整理したい。

まず、傍線部B「代はりたまひにし後、きこえおかす人あまた」から、退下時、斎宮はまだ若く結婚適齢期だったことがうかがえる。伊勢神宮という特殊な空間で成長し、若くして京に戻った斎宮に好奇心を抱いた者が大勢いたのであろう。

この傍線部Bと読み合わせなければならないのは、[3]物語冒頭、広沢の入道の出自についての記述である。

[3]そのころ太政大臣ときこゆるは、朱雀院の御はらからの源氏になりたまへりしになむありける。琴笛の道にも、文のかたにも、すぐれて、いとかしこくものしたまひけれど、女御腹にて、はかばかしき御後見もなかりければ、なかなかただ人にておほやけの御後見とおぼしおきてけるなるべし、その本意ありて、いとやむごとなきおぼえにものしたまふ。　（巻一・一五）

広沢の入道と斎宮は同母きょうだいであり、[3]はそのまま斎宮の設定に重なる。よって、斎宮は女御腹の皇女でありながら後見不在であったことになる。では、「きこえおかす人あまた」は、斎宮が尊厳を脅かされる状況にあったことを匂わせる記述であろう。不婚が原則の皇女でも、後見不在の境遇で多くの男性から思いを寄せられれば、強引に我がものにされたり、不名誉な噂が立つ危険にさらされる。たとえば、『夜の寝覚』成立に近い時代においても、藤原道雅との噂によって、前斎宮当子内親王が出家に追い込まれた事件があったと『栄花物語』に記述がある。父三条院・母娍子皇后が生存中であっても、このような悲劇が起こったのである。

しかし、『夜の寝覚』の斎宮は幸いにも皇女として、前の斎王としての名誉を守り通せたことが、傍線部B「ことのほかにおぼし離れて、世を背かせたまひにけるが」、傍線部C「浅くはあらざりけむ御罪も残りあるまじく、行ひすましておはしますを」からわかる。斎宮は潔癖で、若くして出家して尊厳を守り、そして守り続けることで、ますます自らの皇女としての理想性を高めたのであろう。そしておそらく、太政大臣にまで昇った広沢の入道の庇護を受け、仏道一筋の清らかな生活を送ることができたのであろう。

田中貴子氏は、『源氏物語』以後の物語に登場する斎王経験者について、以下のように指摘されている。[7]

『源氏物語』の秋好中宮の描かれ方からは、その後の物語に現われる前斎宮・前斎院の二つの傾向を予測することができる。一つは、男性の手の届かない神聖な女性として理想化していく

方向であり、もう一つは、成熟という要素がマイナスの意味を持ちはじめ、性愛の対象となるには年をとりすぎた女性という方向である。このうち前者は、いわば肉体を消失した「清浄な」女性のイメージとなり、反対に後者は、過剰なまでに肉体の意味を強調された女性で、簡単にいえば「年をとっているくせにまだ男性との性愛に未練を残した女」となっていく。

では、『夜の寝覚』の斎宮は、前者、「男性の手の届かない神聖な女性として理想化していく」パターンの典型的な例だといえよう。

## 二　寝覚の女君と斎宮

次に、斎宮と寝覚の女君の関係について考察したい。[2]以後、斎宮に関する記述が見えるのは、以下の[4]である。

[4]①入道殿のおぼしも寄らざめるに、「かかりけるよ」なども知られたてまつらむに、いと恥づかしきを、ただかくてあらば、なにの障り所なく入りおはしぬべければ、「人目は様悪しくとも、いかがはせむ」とおぼして、やをら斎宮の御方に渡りたまひにけり。（巻四・四一六）

②「いづくに」と問ひたまへば、「斎宮の御方にこそ」ときこゆ。「などさは。参ると聞きて逃げたまへるか」と問ひたまへば、「などてか。かくのみこそ。さべき法文など習ひきこえさせたまふとて」ときこゆれば、…（巻四・四一七）

③みづからは、物越しばかりをだにおぼし離れ果てて、斎宮の御かたはらを、かしこき陰に立ち離れて過ごしやりたまへば、言はむかたなく嘆き恨みつつ行き帰りたまふを事にて、日ごろも過ぎぬ。（巻四・四二二）

④斎宮の御有様を、「あはれにうらやましくも行ひすまさせたまふかな。幸ひなどいふかたこそ、人にすぐれむこと難く、思ふにかなはざらめ、この世を捨てて、かやうに行ひてあらむことは、いとやすかべいことなりかし。すこし物思ひ知られしより、『何事も人にすぐれて、心にくく、世にも、いみじく有心に、深きものに思はれて、なにとなくをかしくてあらばや』と、身を立てて思ひ上がりしに、世とともには、いみじとものを思ひくだけ、あはつけうよからぬ名をのみ流して、人にも言はれ謗られ、世のもどきを取る身にてのみ過ぐすは、いみじう心憂く、あぢきなうもあるかな。昔、さばかりさべき人々にも疎まれ、言はれたてまつりて、移ろひしほどなど、あふなう髪などをも削ぎやつしてましかば、さしあたりしその折こそうたてあるやうなりとも、入道殿も言ふかひなく、そのかたにもてないたまひて、いかに思ふことなうさはやかに、この世もおのづから住み着き、後の世はたいかに頼もしく、人聞きも物思ひ知り顔にてはやみなましものを。（中略）まいて、憂きをもつらきをも尽きせず思ひ知り、疎ましげなる名をさへ流し添へ、つねに世にもありづかず、浮き漂ひてのみ過ぐすを思ふに、いみじく口惜しく、まして後の世いかばかり暗きより暗きに入らむ道の

たどりも堪へがたからむ。心地もいと苦しくのみあるは、命も長らふまじげなめるを、このついでに、やがて世を背きなばや」

（巻五・四三一～三）

⑤殿渡らせたまふとて、人々騒ぐを、心地のよろしきときこそ斎宮の御方にも渡りたまへ、起き臥すこともいと苦しくのみなりまさりにたれば、えさもあらず、いとうるさくおぼして、「母屋の御簾ども下ろしわたし、御几帳添へて、斎宮おはするやうにしてをあれ」と、のたまひ知らせたまふに、…

（巻五・四四八～九）

⑥「なほあぢきなくと、世をおぼしたちもやする」と、うしろめたく、危ふさに、立ち離れたまはねば、斎宮に御消息ばかりにて、御対面もなきを、いと本意なくあやしとおぼしながら、はかなき御事も心にもかなはず。

（巻五・四九九～五〇〇）

①では、男君は寝覚の女君を追いかけて、慌てて広沢を訪れるが、寝覚の女君は「やをら斎宮の御方」に逃げてしまう。②では、男君は寝覚の女君が「斎宮の御方」に居ることを知り、「彼女は私から逃げたのか」と苛立つが、女房は二重傍線部のように、「寝覚の女君はいつも斎宮に法文など習っている。別に男君を嫌って、今、斎宮の所に移動した訳ではない」と誤魔化している。その後も、③のように、男君が来訪する度、寝覚の女君は斎宮の側から離れない。これらから、内大臣という地位にある男君であっても、神聖な斎宮には近づきがたく、ましてや、斎宮の側で寝覚の女君と語らうなど、タブーであるという意識が看取される。

寝覚の女君の方は、そのような斎宮に依存し、⑤のように体調が悪くて動けない際には、こちらに如何にも斎宮が来ているように偽装工作をする。これらから、寝覚の女君にとって斎宮は、便利な避難場所であり、楯であったことがわかるのである。

斎宮が寝覚の女君をどのように思っていたのかは記述がないが、両者の相性は良いようである。[2]の直前には、老関白が生前、大規模な新築を行い、広沢は「昔にもみな様変はりて」（巻四・四一二）しまったとの記述がある。父の居る所とはいえ、広沢は様変わりしており、ましてや、かつての自分の住まいを他人に使われていては、多少なりとも居心地の悪さを感じるものではないだろうか。しかし、寝覚の女君は約十年ぶりに訪れた広沢に何ら違和感を感じていないし、それどころか、初対面の斎宮とすぐに親しくなっている。

また、斎宮は寝覚の女君にとって人生の指針となる存在でもあった。寝覚の女君は④二重傍線部のように斎宮を羨望し、傍線部b1・2と半生を振り返り、そして破線部のように、このまま悪い評判を流されて生きるのは堪えられず、体調もすぐれないので、このまま出家したいと望むようになる。つまり、斎宮との出会いが契機となり、出家への思いが芽生えたのである。

[2]・[4]各二重傍線部の「うらやまし」の反復から、寝覚の女君が斎宮に出会い、交流する内に、「自分の然るべき生き方は、斎宮のような生き方だったのではないか」という思いに囚われ始めたこ

とがうかがえる。傍線部b1のように、少女の頃に抱いた自尊心を見つめ、また、その自尊心が傷つけられてきた日々に思いをめぐらせ、続いて傍線部b2、「昔、広沢に移った際に出家していれば、安らかに生きられたものを」と後悔するのは、斎宮の、[2]傍線部Bのような、誇り高い生き方に触れたからであろう。寝覚の女君は斎宮の生き方を見習って、出家を思い立ったのである。

このように、寝覚の女君にとって斎宮は、自分が望むときに気軽に訪れ、側にいられる親しい叔母であり、かつ、理想の生き方を貫いた憧れの女性であった。しかし、そのような斎宮は、男君にとっては邪魔な存在でしかない。[4]⑥のように、京へ移居するとき、男君が寝覚の女君を斎宮に対面させなかったのは、これ以上、斎宮から影響を受けないようにという意図によるのであろう。

## 三　末尾部分における斎宮の存在

以上の考察をふまえて、[1]「伝慈円筆寝覚物語切」に目を向けたい。[1]は出家した女君が斎宮の許で、まさこ君と思しき「中納言」や「君たち」、「ちご宮」への執着を絶とうと苦しむ場面である。二重傍線部「つねよりもをこなひあかし給に」「御をこなひのひまには」とあるので、女君が日々勤行に励んでいるのがわかる。

先にみたように、寝覚の女君は出家を志したことはあったが、ただ現実から目を背けたいという思いによる出家願望であり、斎宮に感化された程度であって、決して仏道への深い思いによるものではなかった。巻五から末尾部分に至り、俗世での幸福を諦めるまでの心理がどのように描き出されていったのか興味深い。寝覚の女君と出家の関わりについては、巻五、病床で、

[5]いとよくかくは思ひとりてしものを、内の御事に、かく夢のやうにあきれまどひて、その心もみな乱れたまひて、かかる名をさへ取りつる、　（巻五・四三三～四）

と、「帝闕入事件が起こるまでは出家を考えていた」という述懐が見られる程度である。[5]については、野口元大氏が「しかし、物語は、そのころ彼女の内面が、出家を必然とするような苦悩に追い詰められていたようには語っていなかった」、もしも出家を思い立っていたとしても、「それは宗教的な理由というよりも、現実において称賛さるべき身の振り方の可能性の一つ」としてであろうと述べられたように、[8] 現存部分には[5]に当たるような、出家を願った箇所は見出せない。たとえそのような箇所が散逸した中間部分に存したとしても、巻五よりも、仏道への思いが深かったとは考えられまい。

では、そのような寝覚の女君が、末尾部分において、出家し、[1]のように勤行の日々を過ごすようになったことと、斎宮に再会したことは、深い関わりがあるのではないだろうか。現存部分に見られる斎宮からの影響と[1]を読み合わせてみると、末尾部分において、寝覚の女君はやはり斎宮を手本とし、仏道に心を入れるようになったと推察されるのである。

寝覚の女君の出家時期は明確ではなく、斎宮と再会する以前か以

後のどちらなのかも、わからない。女一の宮との関係や冷泉院からの執着、偽死事件等、様々な憂き目に遭い、苦悩する中で、俗世を捨てる思いを固めていったのであろうが、そのとき、寝覚の女君が理想とし、イメージした出家生活とは、斎宮の生活そのものであろう。何らかの事情によって、再び斎宮と暮らすようになると、やはり巻四・五のように斎宮を羨望する思いはますます強まったであろうし、また、経を習ったり、共に勤行したであろう。

もしかすると、斎宮が、寝覚の女君の出家を援助したのではないだろうか。苦境にあった寝覚の女君を、斎宮が庇護した可能性もあろう。たとえ斎宮の許に身を寄せたのが出家後であったとしても、やはり寝覚の女君は斎宮のような心境に憧れ、見習ったと思われる。

## 結

亡き母の記憶もなく、姉大君とも死別した寝覚の女君にとって、斎宮は唯一、尊敬し模範となる年上の女性であった。斎宮のようになりたいと寝覚の女君は願うが、末尾部分に至っても、斎宮のように心の安寧は得られない。清浄で神聖な斎宮の登場によって、係累への思いが捨てきれない寝覚の女君の姿が浮き彫りになるのである。

〔注〕

(1)「『夜半の寝覚』末尾欠巻部の考察」(『古筆切の国文学的研究』風間書房　平8)。

(2)「伝慈円筆寝覚物語切」本文の引用は田中登・米田明美・中葉芳子澤田和人編著『寝覚物語欠巻部資料集成』風間書房　平9)により、傍線を私に付した。

(3)「『夜半の寝覚』末尾欠巻部の内容――近年出現した資料の位置づけを中心に――」(『国語と国文学』第八十巻第十二号　平15・12)。

(4)田渕福子氏『夜の寝覚』末尾欠巻部の再検討」(『平安文学論究会篇『講座　平安文学論究』第十八輯　風間書房　平16)、「『夜の寝覚』末尾欠巻部分の構造――新旧資料の解釈の再検討――」(『国語と国文学』第八十二巻第七号　平17・7)。

(5)「『夜の寝覚』末尾欠巻部断簡考――架蔵伝後光厳院筆切を中心に――」(『狭衣物語の新研究――頼通の時代を考える』新典社　平15)。

(6)『夜の寝覚』本文の引用は新編日本古典文学全集により、末尾の(　)内に巻・頁数を付記し、傍線等を私に付した。

(7)『聖なる女――斎宮・女神・中将姫』(第三章「結婚しない女たち」一三三頁　人文書院　平7)。

(8)「第三部における人間の認識」(『夜の寝覚研究』第三章　二三四～五頁　笠間書院　平2)。

――あかさこ・しょうこ、広島文教女子大学非常勤講師――